いつかまた、停車場で・・・

兒玉真由美

出会いはいつも偶然の風の中でおこる不思議な巡り合わせである。時間はそれぞれ他者に対して相対的に流れているにもかかわらず，必ず二つが逢うはずになっている点というのが存在する。たとえば偶然手にした本に，ずっと探し求めていた問いの答えを導きだすキーワードを見つけた時，惹きつけられたその背表紙から何かオーラが出ていたのではなかろうかと思うことがある。私にとって“赤祖父哲二”との出会いもまたそうであった。

*

秋風が冷たくなりはじめたある日，名古屋の街角で，私はバスの待ち合わせに少し時間があったのでバス停のすぐ前の書店に入った。その頃私は，畏れ多いことに“批評っていったい何の意味があるんだろう”という夢魔に取り憑かれて悩み始めており，いかにも人間中心主義のレベルで行われている批評に嫌気がさしていたのである。世界のボーダレス化が取り沙汰され，ポストコロニアルといわれる時代において，階級・権力闘争，人種・性差別，民族と宗教の違いをめぐる内戦や，経済戦争による環境破壊がかなり深刻になってきた世紀末に，私たちは日本にいて文学の世界に戯れていてよいのだろうか。政治・経済が蠢く中，自然科学と宗教・哲学と芸術の狭間にあって“文学”には一体何ができるのだろうか・・・溢れ出ようとする発想を“かたち”にしようとするとリアリティーを失うマジックに取り憑かれ，“沈黙は金なり”と失語症めいたものにかかりつつあった私にとって，そもそもリアリティーの存在こそが怪しいものであることに気がつくのに，もはや時間はかからなかった。それ以来，図書館は書物のユートピアに，ミュージアムは時代が混在して共存する理想のヒーリング(癒し)の場に，劇場は新たな詩を生み出すバーチャルリアリティーの空間になり，身も心も北から南，西から東へと“どこにもないどこか”を求めてJAZZを聴きながらひたすら逃走する日々を過ごしていたのである。

話を元にもどすと，そんな時，書店の本棚からふっと『宮沢賢治－光の交響詩』というタイトルが目に入り，心惹かれてその本を手にしたときの衝撃が，今も忘れられない。

「あっ！私が考えていたことは，もうこの人によってなされていたんだ・・・」

そして数年後に，まさか私が筑波に来ることになろうとは，その時は夢にも思わなかった。

*

二月の風の強い日，大学院の入学試験が終わって，私はフランス語ができなかったことに心を傷めながら，大学会館前のバス停に立ってバスの来るのを待っていた。すると坂の向こうからひとり“赤祖父哲二”がこちらへ向かって歩いてくるではないか・・・。私は初対面でどぎまぎしながらも，結局上野駅まで同行させていただくことになり，賢治の科学や宗教の話や，C.W.ニコルの自然の話などに花が咲いて，二時間余りがあっという間にすぎてしまったバスの旅であった。後にどこからかふいてきた風に聞いた話だが，後日“赤祖父哲二”は，私のことを“ちょっと彼女は変人だね”と仰しゃっていたらしい。ちょっと私はショックだった。

二度あることは三度あると云うが，大学院の合格発表の日，二月末にしては風のない暖かな午後だった。今度はバス停でバスの来るのをひとり待っていらっしゃった“赤祖父哲二”が，マウンテンバイクで風のように走ってきた私を見つけられたのである。私はバイクがひっくり返るくらいびっくりしてしまったのだが，先生はわざわざ私と一緒に合格発表掲示板の前まで行って“兒玉真由美”を探して下さったのである。確かに名前はそこに印されていて，私は筑波大学に入学したわけなのであるが，赤祖父先生の授業（通称ＡＫゼミ）は，まさにボーダレスの世界であった。近年のテーマは「物語論」「国家・民族・言語」「文芸経済学」「ジェンダー」等で，テキストをめぐって文学理論，哲学思想から宗教，歴史，民俗学，自然科学へと様々な分野へ話が及んでは果てしなく循環し，午後１時45分から５時を過ぎても終わらない議論の後，私たち院生は頭だけは冴えてなおくたくたになった。

「文学という文明全体のなかでは部分にすぎない問題を探っても，そこには直ちに文明全体の中身が露呈するといったほうがよい。」（『文化のヘテロロジー』）この言葉に，あれだけ多分野への言及を行いながらも専門分野が“文学”であることを貫かれた“赤祖父哲二”の姿がある。ここにきてやっと，私は失っていた言葉を再び取り戻せそうな気がした。

*

既成の枠の中から他者の存在になり，異界に身をおいてこそ初めて見えてくるものがある。たとえば水面が一枚の鏡であるとしよう。地上から水鏡を通して水中を見下ろした光景と，海底から水面を見上げた光景は，そこが同じSPACEであるにもかかわらずまるで別世界のように見える。さらにふたつの決定的な違いは，水面は境界といえども，海側に属した境界（インターフェイス）であるため，“ゆらぐインターフェイス”（＝水鏡）の向こう側の世界である海の中から空（もしくは私達が空だと思っているもの）は，水鏡に遮られているため見ることができないのである。魚は水鏡自体を空だと思っているかもしれないが，彼が陸にあがってゆっくりと本当の空を見たとき，それは彼にとって死を意味する。では今度は，大気が一個のシャボン玉であるとしよう。私達がシャボンの中の地球上から空を見上げた光景と，宇宙からシャボンのように七色に輝く地球を見下ろした光景は，そこが同じSPACEであるとはいえ，見えているものは実は光の悪戯。実際は私達が空だと思っているものとは全然違った異空間が，そこにはただ茫漠と広がっていただけなのかもしれない。世界中すべての“現象”がテキストであるならば，境界（だと思われている枠組）を限りなくずらしていった向こう側から語りかけてくる発想が，時には批評を救い，異端の中からこそ正当が生まれるような気がする。それを私に教えて下さったのは“赤祖父哲二”であり，もはや存在自体がひとつの“現象”となりつつある“KENJI”であるかもしれない。

*

そんなわけで，筑波大学のループの並木通りに風がどうっとふいたとき，私にはそこに“赤祖父哲二”の姿があるような気がしてならない。いつかまた，停車場で“何か”を待っている“赤祖父哲二”の姿を見つけたとしたら，それがたとえ一本の木の下でなくても，「ねえ先生，“ゴドー”はもう来たのかしら？」などとお声をかけてしまうような気がする。筑波にきて早四年，わけあって文章らしい文章も書かずにいた不肖の娘も，親（？）孝行したいときに，赤祖父先生はもう退官されてしまうなんて，今になってひしひしと寂しさを感じている。